

分裂と連帯 －福祉としての建築創作論－

前田 哲男

山口県立大学附属地域共生センター

Disunion and Solidarity － Monograph on Architecture as Welfare －

Tetsuo MAEDA

YPU Center for Cooperative Community Development

Abstract

Kitaro Nishida created a unique philosophy to reveal the underlying structure of the world. Based on the literature from Nishida's career, this study is an attempt to create a theory of creative architecture.

It is very important that human rights are respected and we become free. Nishida's philosophy overcomes the mechanical aspect of everyday life. Furthermore, his philosophy is considered an avenue to creative production.

By holding the essence of his philosophy, I consider the aim of architectural design. And in this study I examined the community of coexistence that will not be dominated by authoritarian forces.

Key words: Value creation, Architecture, Chora, Space-time, Welfare, Disunion, Solidarity

キーワード：価値創造、建築、場所、時空間、福祉、分裂、連帯

1. 序

日本の総人口は2008年を頂点として減少を始めた。合計特殊出生率は人口置換水準より低い水準までに低下し、本格的な人口減少時代となっている。また、地方から都市へ、特に東京圏への移住による人口の東京一極集中が依然として続いている。地方の小規模な市町村では人々が流出していくために、買い物や医療・介護などの生活サービス機能が著しく低下し、現在の生活水準の維持が難しくなっていくことが危惧されている。また、日本の国土の多くを占める中山間地域においては、多くの集落が消滅していく可能性もある。

総人口に占める高齢者の割合は2013年には25%を超え、日本はすでに超高齢社会となっている。今後も高齢化率は上昇を続け、2060年には約40%まで上昇すると見込まれている¹⁾。加えて少子化により、生産年齢人口がより減少し、経済成長がさらに困難になっていくと思われる。

高齢人口を見ると、地方圏では2025年前後に最大値となるが、大都市圏では大幅な増加が見込まれる²⁾。

大都市での医療・介護・福祉需要が極度に増加すると予想され、介護施設や介護専門職の不足が憂慮されている。

このような人口減少・超高齢社会においては、地域社会の運営や都市政策、さらに住宅政策などにおいて、今以上に解決困難な課題が次々に登場してくる可能性がある。高度経済成長時代のような、民間企業利益の追求が社会の繁栄につながり、経済的な富を生み出していくという資本主義の限らない拡大・成長路線が困難になってきている。こうした時代においては、医療・介護・福祉分野と都市・住宅・交通分野が連携し、それらによる協調した取組や政策が重要になってくると思われる。

長寿社会においては、たとえ重度な要介護状態になっても、家族や親しい隣人と切り離されることなく、住み慣れた地域で住み続けられる社会が求められている。こうした社会を実現するためには、フォーマルケアのみならずインフォーマルサポートの充実が求められ、自助、互助、共助、公助の適切な組み合わせが重要になってくる。そして、奪い合

いではなく譲り合いを、排除よりも包摂を、競争よりも共生を、効率よりもゆとりを、物の豊かさよりも心の豊かさを優先すべきであると考えられる。

ところで、建築士はたんに発注者の指示に基づいて建物を設計するだけではなく、建物の企画に関わることも多々あり、この際には建築士の抱えている基本的姿勢が問われることになる。また、発注者の指示に基づく建物の設計であっても、それが一つの行為であるからには、行為の目的や手段さらには行為者の世界観が問われることになる。安易な姿勢での建設企画や建築設計は、社会から批判を受ける可能性が高く、建築士においては、自分自身の倫理観と基本的な姿勢を今一度点検し反省することが、喫緊の課題である。そしてそのためには、人間の精神を含めた具体的な現実世界の根本的構造を探求し、確認する必要がある。普遍的な原則や本質を軽視し、時代の流行に振り回されることを否定しない姿勢は、社会的な責任を放棄することに繋がっていくと考えられる。

本研究は、人間の精神と具体的な現実世界の根本的構造を明らかにすることを通して独自の哲学を創造した西田幾多郎（1870-1945）の文献から、建築創作論の一端を構成しようとする試みである。

2. 純粋経験と意識する意識

西田は砂上の楼閣や表面的な流行現象を嫌い、具体的な現実世界の構造を根底から考えぬいたと紹介することができる。西田とともに、普遍的で有効な哲学的体系は、もっとも確実な基礎のうえに構築されるべきであると主張することができる。そのために西田は、認識や反省や行為を伴うわれわれの経験に注目し、具体的な現実世界の経験を題材にし、それを思索することから出発している。われわれの経験において、主観と客観は分離されてなく一体のものであり、それを西田は「純粋経験」と呼んだ。

哲学的体系には唯物論や唯心論という主張があるが、客観に基礎を置くこと、または主観に基礎を置くということは、いずれも一方だけにかたよってしまい、具体的な現実世界から離れてしまうと考えられる。具体的な現実世界を的確に捉えるために、西田の「純粋経験」では、主観と客観の両者に基礎が置かれている。

そして、「純粋経験」には知情意の区分がない。情意の除かれた知性だけでは、具体的な経験を捉えることができない。哲学は知の体系ではあるが、われわれの経験では感情や意志も重要な役割を果たしている。

さらに、我があって経験があるのではなく、経験があつて我があつてと考えられており、確実な実体としての自我が前提にされていない。なぜなら、われ

われが経験しているときのわれわれの意識を観察すると、意識するという作用と意識が向いている対象は明らかであっても、つまり、ノエシスとノエマは明らかであっても、意識の出発点是不明確であるということが見えてくるからである。

万事に采配をふるう心が身体のどこにあるのかと探したとき、我々の頭の中に心があるとし、心の活動を脳の物質過程に還元したとしても、脳の中に小さな人間が住んでいるわけではないということが見えてくる。脳の中に小さな人間が住んでいると考えたと、その小さな人間の脳の中にもさらに小さな人間が住んでいることになり、無限に続いてしまう。つまり、われわれは「意識する意識」を捉えることが困難であるということを見出す。

形式論理学では「AはAである」といわれる。この主語Aは「意識する意識」であり自我とも呼ばれるが、日々刻々と変化し無常であり、固定された実体ではない。単純に「私は私です」ということはできない。主語Aである私は、様々な関係のもたらす様々な情報に影響を受けており、周囲に紛動され揺れ動くため、自己同一性を簡単には主張することができない。むしろ、主語Aは「主語として絶対の無」と表現する方が適切であると考えられる。

また、自我とも呼ばれる「意識する意識」を捉えることが困難なのは、「意識する意識」を捉えたと思つた瞬間にそれは「意識された意識」になってしまうからである。

意識作用の出発点としての意識そのものは意識の対象となることなく「無」である。デカルト（1596-1650）は、コギト・エルゴ・スムと語ったが、疑っている自分が存在しているということは分かっていても、疑っている自分の意識を意識した瞬間にそれは「意識された意識」になってしまう。

経験があつて我があつてということは、自我があつて、自覚や認識や反省をするということではなく、自覚や認識や反省という作用を通して、自分の今の心の姿が意識に登場してくるということである。また、感情が突然に襲ってきたり、欲望が意志によって制御できなかつたりする我々の精神現象を観察すると、この「意識する意識」は感情や意志と関係が深いことがわかる。

ここで時の経過を含めて日常生活を考察する。昨日の生活と今日の生活、昨日の自分と今日の自分を見比べると、詳細に観察をすれば多くの差異が見られる。しかし、それにもかかわらず、我々は、昨日の自分と今日の自分は同一であり、普段と変わらない日常生活を繰り返していると見なしている。このとき、厳密なる知性を用いて、この同一性を疑い始めると、昨日のAと今日のAには様々な差異が見いだされ、両者は別人であると結論づけることに

なってしまう。知性をあまりに厳密に使用しすぎると、袋小路に陥ってしまい、自我は簡単に崩壊してしまう。このように、自我は無であるとともに、崩壊しやすいものであると考えられる。

そこで、問題なく日常生活を過ごすためには、同一性を感じ、さらに信じるという感情と意志が必要になってくる。

この感情や意志は、人間の自由という問題や芸術活動に関連していく。ところで人間は、食欲などの生理的欲求だけで生きているわけではなく、自由と放縦とは違う。自由奔放な行動は、我々が自分自身を見失い行く方向である。そして、自由や芸術の問題は、倫理や当為の問題とも関連していく。

3. 場所と境涯

「意識する意識」は明確な像を結ぶことがなく、これを捉えることはとても困難である。しかし、これを不問にするわけにはいかない。そこで西田は「意識する意識」を的確に捉えるために「場所」という新たな概念と思考方法を提示した。つまり、媒介者や包摂関係で具体的な現実世界を捉えていこうとした。そして、この「場所」という概念は、人の境涯という倫理観と繋がり、境涯の広さや高さが、一般者や普遍的な世界と繋がっていくことになった。西田の「場所」の論理は、人間の境涯や心の豊かさを見つめ、言葉で定義づけをすることのできない真実や本質、つまり、言葉を超えたところの真実や本質を見ようとする試みである。言葉を破り、形なきものの形を見、声なきものの声を聞こうとする試みである。

自分が自分自身の行為を反省するとき、行為をしていたときと同じ状態で反省すると、判断を誤る可能性がある。的確な反省のためには小さなこだわりから卒業し、行為をしていたときより高次のレベルにすることが必要になってくる。さらに、人は反省している自分をも外から熟視することができるが、そのときには、当初の反省より、境涯の高い心が必要になると考えられる。

ところで、自然現象や社会現象、また他者の心や自身の心を知り理解することと、未来へ向けて選択し行動していくこととは世界が違う。「であること」が直接「なすべきこと」には繋がらない。「なすべきこと」を見つけるためには、境涯の高さが必要になってくる。境涯の低い自己中心的な欲望に基づく奪い合いの行為においては、普遍的な倫理の世界は登場してこないと考えられる。

境涯の低い自己中心的な欲望を突き破り、多様な人々の多様な世界を肯定し、尊重し、包摂し、互いに譲り合うことによって、普遍的な倫理の世界を創造していくことができる。そして、現実には流されず

に、境涯の高い理想的な自分を求める意志があればこそ、諦めをしりぞけ、現実の課題に対して、冷静かつ柔軟に対処できると考えられる。

4. 場所と時間論

この世界に生起する様々な現象に対して有効な対応策、「なすべきこと」をどのように講じるかを検討するとき、様々な現象をどのような枠組みで捉えるかということが重要になってくる。そしてこの点に関しては様々な立場が想定される。たとえば一般的な自然科学研究に見られるように、絶対空間や絶対時間を前提にし、原因と結果の連鎖によって諸現象を記述していくのも一つの立場である。偶然と思われた現象を分析すると、そこに必然的な法則性が見いだされることがある。

しかし、アインシュタイン(1879-1955)によって相対性理論が発表されてからは、時のテンポが変化したり、空間が歪んだりする現象の存在が発見され、絶対時間や絶対空間による時間空間座標の適用範囲が狭められてきていると考えられる。

ここで、西田における時間論を考察する。西田の時間論は均質化された時計時間(客観的な科学的時間)でもなければ、個人差の登場する主観的な時間でもない。現在を起点とした時間であり、「永遠の今」という用語をもとにして独自の時間論が展開されている。1932年に『無の自覚的限定』が公刊されているが、この中の「私の絶対無の自覚的限定といふもの」という論文でこの用語が登場し、さらに「永遠の今の自己限定」、「時間的なもの及び非時間的なもの」という論文の中に、この用語が続いて登場してきている。

西田哲学において時間論の占める位置は高く、自他の関係を論じる論文にも登場してくる。自他の関係を論じる論文は前掲の『無の自覚的限定』の中に収録されている「私と汝」である。他者や自他の関係を論じる時、時間をどう捉えるかということが根幹になるという立場であるが、今まで発表されてきた論文における時間論を総括するような形で、この論文の初めに登場してきている。

時間は次のように、すべての実在の基本的形式と考えられている。

「すべて実在的なものは時に於てあると考へられ、時は実在の根本的形式と考へられる。内界と考へられるものも、外界と考へられるものも、それが実在的と考へられるかぎり、時の形式に当嵌つたものと考へられねばならぬ。」³⁾

ところで、先に見たように、時においてある「私」を定義することはできない。単純に「私は、私です」と主張することは困難である。というのは「私」には固定された実体がなく、時につれて変化

していくからである。また、他者との関係も変化する。周囲に紛動され揺れ動き、常なるものがない無常だからこそ時間論が重要になってくると考えられる。

一般的に時間は、過去から未来に向かって流れ去る1本の直線として考えられている。しかし、我々の生きられた具体的な現実世界は、過去や未来から始まるわけではなく、現在という瞬間から始まる。現在が固定されることによって、過去と未来が登場してくる。つまり、我々は現在を起点として、記憶によって過去を思い出し、想像によって未来を予想している。西田においては、自分のいるところ、そこが現在であり、この所である。この所から彼の所が見られ、現在から過去や未来が見られると考えられている。

「時は現在が現在自身を限定するといふことから考へられるのである。而して現在が現在自身を限定するといふことから時が限定せられるといふことは、時は永遠の今の自己限定として考へられると云ふことを意味してゐなければならない。時は永遠の今の自己限定として到る所に消え、到る所に生れるのである。故に時は各の瞬間に於て永遠の今に接するのである。時は一瞬一瞬に消え、一瞬一瞬に生れると云つてよい。非連続の連続として時といふものが考へられるのである。」⁴⁾

「場所」の論理では、すべての概念に対してそれを包摂する概念が考へられ、現在の瞬間に対してそれを包摂する概念は「永遠の今」ということになる。時というものは一瞬一瞬に消え去るとともに消えない。この消え去るものと消え去らないものとで構成される瞬間において、消え去ることのないものが、「永遠の今」である。そして、「永遠の今」において、現在の一瞬に、過去と未来が引き寄せられている。

現在から考へられた時は、永遠の過去と未来をもち、永遠の今の自己限定として考へられ、さらに、連続ではなく時の非連続という面が目される。瞬間に対する日常的なおおらかな見方を取り除けば、西田の言うように、瞬間が過去を消し、瞬間から未来が始まると考へられる。つまり、我々の一瞬一瞬が死であるとともに生であり、あらゆる瞬間に、あらゆるものが無へと消え、そしてすべて新しく生み出されると考へられる。

過去の出来事にとらわれ過ぎることなく、また未来の夢におぼれることなく、現在のこの瞬間を我々は、前向きに真剣に過ごしていくことが大切である。

「時といふものが斯くして考へられると考へるとするならば、時は各の瞬間に於て二つの意味に於て永遠の今に接すると考へる事ができる。永遠の今と考へられるものは、一面に於ては絶対に時を否定す

る死の面と考へられると共に、一面に於ては絶対に時を肯定する生の面と考へられねばならない。時の限定の背後に永遠の死の面といふものを置いて考へる時、永遠なる物体の世界といふものが考へられ、その背後に永遠の生の面といふものを置いて考へる時、永遠なる精神の世界といふものが考へられるのである。」⁵⁾

過去と現在と未来が接続しないとき、人は精神的な異常の世界に陥る。自我も簡単に崩壊するが、時間も簡単に崩壊すると考へられる。このように、具体的な現実世界の現在において、生と死、生命と物質など、互いに矛盾するものが同居しているということが、西田の基本的立場である。

このことは、我々の弛緩した日常生活への批判と考へることもできる。我々はあまりにも時を粗末に扱っているのではないだろうか。そして、それとともに、西田は、情意の生み出す「瞬間的な発想」の重要性とその可能性を見ている。つまり、芸術家の創作行為においては、一瞬にして無限の深みを見る可能性もあると考へられる。

何もしなくても、過去から未来へ社会は進化論に基づき自ずと進歩していくということにはならない。事態を切り開いていこうとすると、現状を反省しその不備を修正していく努力が必要になる。そのとき、他者と過去は変更できないが、自分と未来は変更することできると考へられる。

5. 因果論と目的論

具体的な現実世界は物と物、個物と個物が相互に矛盾し対立しあいながら、同時に世界は世界として自己同一性を保持していると思へられる。絶対に矛盾するもの、対立するものが、相互に矛盾し対立しあいながら、しかも同時に自己同一性を保持している。西田はこの具体的な現実世界の根本的構造を「絶対矛盾的自己同一」という用語とともに主張した。1932年に『哲学論文集第三』が公刊されているが、この中に「絶対矛盾的自己同一」という論文が収録されている。

具体的な現実世界の根本的構造を西田は、「相反するものの自己同一」、「相矛盾するものの自己同一」「弁証法的自己同一」などと様々な用語を用いて表現していたが、最後に「絶対矛盾的自己同一」と統一し、この用語は西田の後期の重要な概念になっている。

「矛盾的自己同一の世界は、いつも現在が現在自身を限定すると考へられる世界でなければならない。それは因果論的に過去から決定せられる世界ではない、即ち多の一ではない、又目的論的に未来から決定せられる世界でもない、即ち一が多でもない。」⁶⁾

この論文で西田は現実世界を、物質的世界、生物

的世界、歴史的世界と三つに分類している。物質的世界は物理的世界でもあり、過去から未来へ、多から一へ、多数の物質が一つの結果を生み出す因果論的世界である。そして、生物的世界は未来から過去へ、一から多へ、一つの目的に向かって多くの細胞が活動していく目的論的世界である。

われわれが生きているこの歴史的世界は、因果論的世界や目的論的世界ではない。何もしなくても、過去から未来へ社会は進化論に基づき自ずと進歩していくということにはならない。むしろ芸術的創作の世界であり、現在が一瞬一瞬、自己自身を限定していく創造的世界であると考えられている。

「現実とは単に与へられたものではない、単に与へられたものは考へられたものである。我々がそこに於てあり、そこに於て働く所が、現実なのである。働くといふことは唯意志すると云ふことではない、物を作ることである。我々が物を作る。物は我々によって作られたものでありながら、我々から独立したものであり逆に我々を作る。」⁷⁾

われわれは物によって作られることによって物を作っている。また、環境はわれわれが作ったものであるが、その環境によってわれわれが作られている。われわれの歴史的世界には、「作り作られる」弁証法的な関係があると考えられている。自己と環境や世界との間の相即的關係は、何度も語られる西田の基本思想である。

西田はこれまでの主張を整理して、次のように語っている。

「世界を多から、或は一から考へるならば、作られたものから作るものへと云ふことはあり得ない。世界を機械的に或いは合目的的に考へても、かかることがあることはできない、否、作ると云ふききことも入れられる余地はないのである。然るに多が自己否定的に一、一が自己否定的に多として、多と一との絶対矛盾的自己同一の世界に於ては、主体が自己否定的に環境を形成することは、逆に環境が新たな主体を形成することである。」⁸⁾

具体的な現実世界には様々な矛盾が同居している。多と一、個物と全体、内と外、生と死、時と空間など、現在は矛盾の巣窟である。

「多と一との絶対矛盾的自己同一として、自己矛盾によつて自己自身から動き行く世界は、いつも現在に於て自己矛盾的である、現在が矛盾の場所である。抽象論理の立場からは、矛盾するものが結合するとは云はれないであろう、結合することができないから矛盾すると云ふのである。併し何処かで相触れなければ矛盾といふこともあり得ない。対立が即綜合である。そこに弁証法的論理があるのである。」⁹⁾

ここで対立即綜合と書かれているが、西田のいう

「矛盾」は通常の意味とは異なっていると考えられる。通常「矛盾」は、二つのものの対立が両立せず、相互に排他的となっているという意味である。しかし、西田のいう「矛盾」は非両立的なものでも、排他的なものでもない。さらに、矛盾対立するものがただちに総合されるとは考えにくい。

「主体が環境を形成する。環境は主体から作られたものでありながら、単に作った主体のものではなく、之に対立し之を否定するものである。我々の生命は自己の作ったものに毒せられて死に行くのである。何処までも主体が生きるには、主体が更生して行かなければならない、絶対矛盾的自己同一の歴史的世界の種として世界的生産的となつて行かなければならない。」¹⁰⁾

西田が指摘しているように、一瞬一瞬に永遠なるものに触れることを通して、自己の行為や働きに世界性をもたせることはとても重要なことである。と同時に、社会をどのように改革していくかの視点も重要であると考えられる。

6. 住宅政策と福祉政策

自我は崩壊しやすく、時間には不連続性が含まれており、過去と未来が接続しない可能性がある。また、具体的な現実世界には様々な矛盾が同居している。多と一、個物と全体、内と外、生と死、時と空間など、現在は矛盾の巣窟である。歴史的世界は過去から決定される因果的世界でも、また未来から決定される合目的世界でもない。何もしなくても、過去から未来へ社会は進化論に基づき自ずと進歩していくということにはならない。

建築の設計は、周辺環境や歴史との対話であると考えられる。周辺環境とどのように関係づけるのか、過去や未来とどのように接続させるのかを考える作業である。このとき、歴史には目的があるのか、また、歴史法則が存在するのかについては、見解の分かれるところであるが、西田のように、合目的性や因果関係によって歴史が必然的に進行するわけではないと考えられる。具体的な現実世界の根底には、断絶や不連続性があり、様々な偶然も登場してくる。さらにまた、我々の価値創造の活動による飛躍的な発展の可能性も存在すると考えられる。

ここで、戦後日本の住宅政策の歩んできた道を振り返る。日本では住宅は自助努力で得るものとされた。公共の賃貸住宅はセイフティネットの役割を担っているものの、一般の勤労者住宅としては位置づけられていない。

生活保護制度が整備されているが、住む住宅がなければ憲法25条で定められている「健康で文化的な最低限度の生活」を確保することができない。住む住宅のない社会福祉制度は機能しない。しかし、こ

うした居住福祉の視点が考慮されてなく、持ち家主義が宣伝され、住宅政策は景気浮揚の道具にされてきている。そして、住宅は個人資産のため、多くの住宅の寿命が一世代になっており、壊しては作るという使い捨て社会にもなっている。一つの住宅を手直ししながら何世代にもわたって住んでいくという住文化は育っていない。まさにこのことによって、建築士による実験的な創作活動がしやすい社会になっている。

しかし、個性的な条件による個性的な建築を目指し、社会に話題を提供すれば良いということではない。また、普遍的な建築を追い求めることは、個別の条件を無視し、画一的で標準的な形式に押込めることでもない。

個性的な人間の一生が普遍的な世界を示すことがあるように、差異を超えて普遍性を追い求めている建築士による個性的で特殊解的な建築は、新たな建築として、建築の可能性を広げることにつながっていく。しかし、建築士による実験の適用範囲は、別荘や郊外の住宅に限られると考えられる。一人の建築士が都市を設計することはできない。それは建築士が暴君になることに繋がり、超越者による世界支配はありえない。

地域づくりや都市づくりにおいては、住民と行政が協働することが求められている。このとき、個人の人権が尊重されることによって、多様で民主的な社会が形成されるが、そこでは、最も恵まれない立場の人々にとって最大の利益になるように配慮するなど、排除よりも包摂が、競争よりも共生が求められると考えられる。

そして、住民の合意形成のために、住民の思いの根底に横たわる普遍性を探求することで、住民間の対立を超えて両立する複合的な世界を構築することが、建築物や環境の創造を導くことに繋がっていくと考えられる。また、生きられた社会を構成している人間関係とは、相互に争うものでも、相手を利用するものでもない。平等と人間生命の尊厳に根ざした、他者の絶対的尊重という人類共通の倫理に基づくものである。

歴史や世界において登場してきた様々な文化の差異を超えて、他者の文化を積極的に認め、原理主義や排他主義に走る人間の傾向性を、他者尊重の重視から拒否することが大切である。物の豊かさ以上に心の豊かさや美しさが求められているが、それは心地よい人間関係が社会には必要であるからである。その心地よい人間関係は社交という小手先の技術から登場する世界ではなく、他者尊重の精神から生み出されるものであると考えられる。

7. 結論

住宅は自助努力で得るとされた日本では、住宅は芸術であるという主張が登場した。芸術は瞬間的な生命の輝きなど、瞬間を永遠に高める力を持っている。この時、この一瞬しかない価値を永遠の美へと昇華させる力を持っている。さらに、個性が普遍性を歌いあげる芸術には、国境はない。差異を超えて人と人の心を結び、異なる文化を結ぶ力を芸術は持っている。この意味で住宅は芸術ではある。しかし、一人の建築士が都市を設計することはできない。それは建築士が暴君になることに繋がる。

人類の平和と文化のために、個人の尊厳はすべての価値に優先する。人間を迫害する勢力に対して非暴力による平和の戦いに取り組む。異なる思想に学び、そこに人間の共通の倫理を探り、そのことで普遍的なヒューマニズムを育む必要がある。そして、住民と行政が協働する成熟した市民社会を發展させるために、我々は、誰もが排除されない、相互の尊敬と信頼に貫かれている社会を築く必要がある。権威的な力に支配されることなく、自由に交流し發展できる共生の社会をめざすことが大切である。

自由で平等な個人が友愛の絆で結ばれる社会を目指し、社会的・経済的不平等を編成し直すときに登場する困難な課題の解決に際して、西田の哲学の積極的な理解による福祉としての建築創作論は、建築士による有効な活動の推進力になるとともに、市民が主役になる社会づくりに貢献すると考えられる。

註

- 1) 国立社会保障・人口問題研究所：日本の将来推計人口（平成24年1月推計）
- 2) 国立社会保障・人口問題研究所：日本の地域別将来推計人口（平成25年3月推計）
- 3) 西田幾多郎：西田幾多郎全集第五巻、岩波書店、東京(2002)、p.267
- 4) 西田幾多郎：前掲書、pp.267-268
- 5) 西田幾多郎：前掲書、p.268
- 6) 西田幾多郎：西田幾多郎全集第八巻、岩波書店、東京(2003)、p.368
- 7) 西田幾多郎：前掲書、p.372
- 8) 西田幾多郎：前掲書、p.376
- 9) 西田幾多郎：前掲書、p.377
- 10) 西田幾多郎：前掲書、p.382